
ファンタジスタクランチ ~ 悪魔王の呪い ~

S H J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジスタクラランチ〜悪魔王の呪い〜

【Nコード】

N8816X

【作者名】

SHJ

【あらすじ】

20年後に再び復活を遂げる輪廻の悪魔王デオグルグ。その悪魔を封印するべく、一人の巫女とお調子者の護衛が立ち上がる。剣とか魔法とかの世界のファンタジー作品/サクサク読める様に、1話1話を短めに作っています。

・プロローグ

200年に1度、ここ王都アルカパサでは盛大な祭が開催される。

その祭りは、悪魔王デオグルグを封印する旅に出た巫女が帰ってくる事で盛大に開催されるのであった。

しかし、その悪魔王も200年を得てまた新たに復活するので、次の封印の旅に出る巫女もこの祭で決められるのだ。

200年もの間、こうして悪魔王から世界は守られて来たのだ。

そしてまた…ここに、一人の巫女が決された。名をメルディア・エシャロットと言い…古代の言葉で『聖なる天の使者』と言われ、その名の通り強い力を持った巫女が誕生したのである。

2

この時、まだメルディアが幼少の時であった…

それから幾年が流れ…

再び悪魔王が世界に現れた…。

・プロローグ（後書き）

キャラクター紹介は、第1話からちよくちよくしていきます。

第1話：護衛（前書き）

小説の題名が思い付かなかったので、意味は無いです（笑）

第1話：護衛

「うぬう〜…ふむむ…」

王都アルカパサの町の一角、小さな社に頭を抱えて悩む女の姿があった。

年の頃、成人を越えてまだ若いであろう女は、床に座り何枚もの紙を見ながら悩んでいた。

「ふむう〜…ぬぬぬ…」

その幾多の紙には、年の瀬がバラバラな戦士やら剣士やら魔法使いやらの姿と、その者の性格や能力が精細に描かれていた。

「うぬう〜、酷な話よのう…この中から決めないといけないとは…」

この女は、20年前の祭で決められた巫女。メルディアであった。

悪魔王復活に伴い、封印の旅に出る事が決まったのであるが、その旅のパートナーである巫女の護衛を決めなくてはいけないのだ。

そしてその護衛は、旅が終われば婿として迎えなければいけない決まりがあった。

その為か、紹介された婿候補達は、全て金持ちの箱入り息子みたいな者ばかりであった。

悩むメルディアにお構い無しに、社の扉が乱暴に開かれた。

「メル様あー！何故、わたくしを選んで下さらぬ！」

見た目は真面目そうで、腰に6本の剣を差した若者が社に転がり込んできた。

「言っておるじゃろ！この旅は危険を伴う旅じゃと！お主の様な貧弱な者と旅など出来ぬわ！」

メルディアは、一寸だけ若者に目をやるとすぐに婿候補の紙に視線を落とした。

「このキルト！メル様の護衛を果たすために日々精進をして参りま

した！」

若者　キルトは、涙ぐましく天を仰ぎメルディアを見つめた。
このキルトとは、小さな頃から一緒に育ってきた様な幼馴染みなのだ。

確かに、剣の腕前は婿候補と比べ若干ながらキルトの方がまだマシなのだが…一生のパートナーとしては、性格に難ありと言った所である。

しかし、悩めば悩むに連れて…封印の旅が危険な事には変わりなく箱入り息子と旅に出て失敗するよりか…このキルトを連れて行った方がまだマシだと言える訳でもあった。

メルディアは散々悩み、苦汁を飲みその結果…キルトを護衛に選んだ。

「メル様！わたくしを護衛に選ぶと言うことは将来は、このキルトと結ばれると言うことで間違いありませんね？」

「うぬ…まあ、掟が掟じゃからな…しょうがあるまい」

キルトは、目を輝かせ涙をポロポロと溢しながらその場で舞い踊る。

「ああー！精霊のご加護があらせられますように！遂に、メル様がわたくしを選ばれた！」

このハイテンションに踊るキルトを尻目に、頭を抱えてため息をつくメルディアの姿があった。

「メル様！早速、将来の為に！今後メル様の事を呼び捨てで呼んでもよろしいでしょうか？」

キルトは片膝をつき、メルディアに片手を伸ばし答えを求める。

護衛を決める事〓婚約と取っても過言では無い…のだが、メルディアはズカズカとキルトに近づくと胸ぐらを掴んだ。

「調子に乗るのでないぞ！私は巫女！お主は護衛！お主の働きにより、私はこの掟を破棄出来るのであるぞ！」

もちろん、そんな権限はあるわけ無いのだが、その言葉を聞いたキルトは震え上がりメルディアの手から逃げ出すと正しい姿勢で座り

直し頭を下げた。

「分かったのなら、もう行くのじゃ」
メルディアがキルトを睨む。キルトはまた深々と頭を下げて社から出ていった。

数分ほど、社の扉を睨み続けそして視線を落とし頭を抱えた。

やはり、箱入り息子と旅に出れば良かったかと深く後悔する。

あの性格が、何年経っても慣れないのだ…。

しかし、もう決めてしまった事に後悔してもしょうがないので、明日から始まる長い旅の支度をモソモソと始めた。

第1話：護衛（後書き）

キャラクター紹介

巫女：メルディア（通称：メル）

秘めた力がある。言葉使いが、古くさいがまだまだ若い。

護衛：キルト

お調子者。一緒に居ると疲れる。性格に難あり。

第2話：罪人

「それでは、巫女様：コチラの剣をお持ち下さい」
一人の神官が、1本の剣を差し出した。

その剣は、いくつもの術式が施してあり、強い魔力を感じる程の黒刃の剣であった。

「こちらは、悪魔王封印の為に先代の巫女様から代々受け継がられてきた封印の剣でございます」

メルディアは、差し出された剣を受けとると、全身にピリピリとした魔力が走り渡った。

代々受け継がられてきたと言うことが、持っただけで分かる強い魔力であった。

「ふむ…私は、剣など振ることさえまならぬのじゃが」

「大丈夫でございます。巫女様は、剣を振らぬとも、その封印の剣は悪魔王を封印してくれませぬ」

しかし、メルディアには分からない事があった。強い魔力を放つ剣なのだが、何故この剣は悪魔王を20年しか封印する事が出来ないのか…。

「メル様あゝ！お任せ下さい！わたくしが、もしもの時に一緒に剣を振りますゆえに…」

「黙るのじゃ！！」

皆が真剣に話している場でも、全く気にせずいつもの調子で話すキルトにメルディアは、怒りを表す。

この封印の剣が人間に効くのであれば、今すぐにもキルトを封印したい気持ちはあったが、ぐっと抑える。

もう、どう転ぼうにもキルトとの婚約はねじ曲げる事は出来ないのだから。

「巫女様。コチラが今回の旅の罪人でございます」

今度は違う神官が、手錠をはめてボロボロの布を身に纏った罪人を連れてきた。

「ふむう…何故、罪人など必要なのじゃ？旅のお供に、100歩譲ってキルトを連れて行くと決めてあるのに…」

メルディアは、罪人の顔をじつと見つめた。

顔は泥や埃であまり見えないのだが…まだ、メルディアよりも若い少年であった。

「はい。それについては、今ご説明を致します」

神官は頭を下げてから今回の旅の事について語りだした。

「悪魔王の封印の旅と申されても、悪魔王は5つの魂に別れております。巫女様は、5つの魂をコチラの罪人に移し代えて最後にこの罪人ごと悪魔王を封印するのが目的でございます」

「なぬ？お主は私に、人を殺せと申すのか！」

あまりに、平然に当たり前のように話す神官に怒りが込み上げてくる。「人ではありません。5つの魂を移し代えれば、それは既に悪魔王でございます」

「そう言う事を言ってるのでは無いわ！罪人とて、人は人であろうが！魂を移し代えた所で、それは既に人を殺すと代わりは無いわ！」
例えそれが世界を救う為だと言う事ではあるのだが、人を犠牲に世界を救うと言うのは間違えているとしか考えられなかった。

「巫女様。この者は、死んで当然の者でございます」

「なんじゃと？」

「メル様あゝ！コイツは、既に人を殺した重犯罪人ですので、死んで当然なんですよ」

必死に笑いをこらえながら話すキルトに、再度メルディアは一喝を入れる。

「その者が、人を殺めていようが無かるうが…人を犠牲にしてまで封印は出来ん！私は、他の方法を探す！」

神官に指を差しビシツツと言いつ放つが、神官は一つため息をつくとき首

を横に振る。

「それ以外方法は、ございません。先代の巫女様達は、やはり他に方法を見つげようと努力しました……が、結局は罪人を犠牲に致しまして、今の平和が守られていますのです」

きつと、死に物狂いで他の方法を探したに決まっている。先代の巫女達が、旅から帰って来るときは、心なしか皆暗い表情をしている。旅の疲れか、と思う人も居ると思うが……一時の平和の裏では、人を犠牲にする方法が取られていたのだ。

もはや、そこまで言われてしまえば……反論の余地もなくメルディアは致し方なく罪人を犠牲にする形で手を打った。

「巫女様……後こちらをお持ち下さい」

神官が新たに差し出した物は、銀細工の綺麗な銃であった。おかしな所は、弾を入れる所が無い。

「コチラは、魔法銃と言います……巫女様自身の魔法力を銃に注ぎまして、それを纏めて放出出来る物でございます」

「そうか……でも、私は精霊術が使えるので必要無い気がするのじやが」

いかにも重そうな銃を見下ろす。封印の剣に魔法銃まで持つと、それだけで大荷物になってしまう。

すると、横から得意気にキルトがしゃしゃり出てくると、神官から魔法銃を奪う。

「こちらは、わたくしがお持ちします！逃げ出しそうになった罪人を巫女様の代わりにこの魔法銃で撃ち殺して差し上げます故に」

弾の入っていない魔法銃を罪人に向けると、躊躇なく引き金を引いた。

カチツと魔法銃の音が社に響き渡る。

「バカ者！銃を人に向ける奴があるか！」

メルディアのゲンコツがキルトの頭に綺麗に入ると、魔法銃を奪おうとするが……キルトは頭を押さえながらメルディアを拒んだ。

「も…申し訳ありません。しかし、この魔法銃はわたくしがお持ちしています」

キルトは足軽に後ろに飛びはねながら下がると、魔法銃を自分のベルトに押し込んだ。

「巫女様、それでは…最初にアルカパサ出てを西に行きますとマケルの森がございます。それほど、大きな森ではございません。森を抜けますと、近くにリンリンの村がございます。その村の神官に、第1の悪魔王の呪いの場所をお聞き下さいませ」

あまりに、長い神官の言葉1つ1つを頭に刻み込みながら頭の中で確認をしていく。

神官から地図と食糧7日分を渡される。メルディアは、忘れ物は無いかと確認をしてから、社の扉を開いた。

「巫女様いつてらっしゃいませー！」

「巫女様！お気をつけて！」

「キルトー！しっかり巫女様をお守りするんだぞー！」

社の扉から外に出ると、アルカパサの町の全員が集まっており、町の出口まで道を作っていた。

「みんな！心配すんなって！このキルト様が、世界を救う巫女様の護衛なんだからな！」

キルトは大ハシャギしながら町の者に大きく手を振り道を歩いていく。

「ふむ…それでは、行ってくるぞ」

背中越しに神官に手を振りメルディアは、歩き出した。その後ろから、ジャラジャラと手錠を鳴らしながら罪人も歩き出す。

「巫女様！お気をつけて！」

「巫女様！いつてらっしゃい！」

騒ぐ町の者に軽く手を振り、出口に向かっていく。

「あつ：あれが、今回の罪人ね」

「これで人を安易に殺せば、必ずしも我が身に降りかかるって思いしったわね」

ヒソヒソと話してるつもりだろうが、道を挟んで前にいる町の者にも聞こえる声で町の人が話し出している。

しかし、罪人は聞き流しながらメルディアの後をついていくだけであった。

「あの罪人ね：北の大陸にある王都ケセルヌアの領主様を殺したそうよ」

なんとなくメルディアは、その話に聞き耳をたてるが、町の人達の声によつて書き消されてしまう。

町の出口に着くと、メルディアは後ろを振り返り町の人達に手を振った。

町から大歓声が上がリ、その声を背中に受けながら、キルトそして罪人を連れて旅立った。

第2話：罪人（後書き）

用語 【魔法銃】魔法の銃。自身の魔法力を練り込み放出する事が出来る。キルトには、魔法の力が無いのだが：何故かキルトが持っている。／／【精霊術】この世に存在する精霊を呼び出し攻撃とか回復とか出来る。精霊術は、限られた人にしか出来ない。これが使える者は、大抵巫女に選ばれやすい貴重な術。／／【罪人】世界の平和を守る為に旅に同行することになった。しかし、その罪人の役目は犠牲になる：つまり人柱になる事である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8816x/>

ファンタジスタクランチ～悪魔王の呪い～

2011年10月26日03時08分発行